

No.119

1997.

10. 31

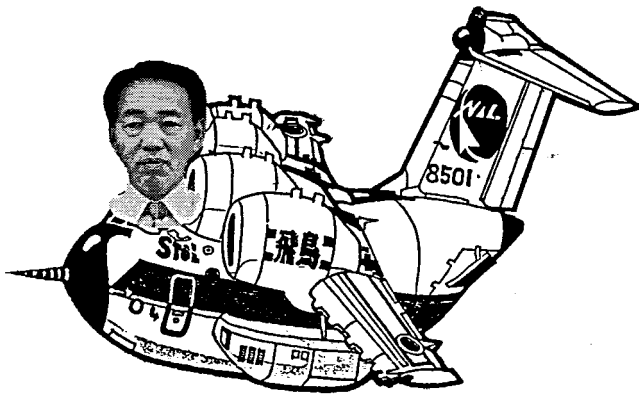
岐阜の博物館

編集兼発行

〒501-32 関市小屋名
(岐阜県百年公園内)
岐阜県博物館内
岐阜県博物館協会
TEL 0575-28-3111
振替名古屋 637909

空を飛ぶ夢

かがみがはら航空宇宙博物館長 岩間 一雄



各務原市のほぼ中心地にある各務原台地

アメリカのライト兄弟が1903年に人類初の飛行に成功してから9年後の1912年(大正元年)にこの台地に陸軍の飛行場建設が開始され、14年後(大正6年)には、所沢飛行場を飛び立った徳川大尉の操縦する複葉機が初めてこの飛行場に着陸しました。

その後、飛行場は着々と整備され、これと併行して5年後の1922年(大正11年)に早くも陸軍の乙式一型偵察機(サルムソン2A2型複葉機)の生産が川崎造船所各務原分工場が始まりました。以後、終戦までの間、三菱、川西、愛知航空機などの多くの航空機メーカーの飛行機がこの地で飛行し、試験されました。

戦後は自衛隊・科学技術庁航空宇宙技術研究所(NAL)・地元航空機メーカー等の飛行試験基地として飛鳥(あすか)など多くの国産機の初飛行や実験飛行を繰り返してきました。

このように、各務原市と航空機産業とは切っても切れない関係として戦前・戦後から現在へと受け継がれてきました。近年では宇宙産業の発展もめざましく、地元メーカーではH-IIロケットの大型衛星フェアリングの開発・製作、

また国際宇宙開発の一環として独自の宇宙ステーション実験モジュールや宇宙往還機などの開発の一部を担当しています。航空機は戦争と平和との間を飛び交いながら発達してきましたが、21世紀に向けて新たな平和のための航空宇宙の時代に羽ばたく事でしょう。

そして、今年飛行場ができて80周年を迎えることになりました。こうした歴史を背景に、平成8年3月に「かがみがはら航空宇宙博物館」を開設し、はや1年が経過しました。当博物館は、各務原市の新しいシンボルとしてさらに、日本の航空宇宙産業の軌跡を知る上でもこの博物館の果たす役割は大きいものと思います。

当博物館の特徴は、飛行機の展示だけではなく参加体験型博物館を目指し、VR(バーチャルリアリティ)の最新技術を駆使したシミュレータ6基からなる体験学習館の他、下記のような様々な施設で楽しみながら学んでいただけるものと思います。

- ・飛鳥内見学
- ・ヘリコプター操縦装置
- ・小型飛行機(FA-200)を使っての飛行機の飛ぶ仕組み解説
- ・パソコン紙飛行機製作
- ・宇宙パソコンコーナー

このように、単に市のイメージアップと活性化を目的とするだけでなく、次世代を担う子供たちにも「科学する心」・「モノ作りの大切さ」を育むことのできる教育の場としても、また「近代産業文化遺産」の継承の場としても期待されています。

終わりに、新しい航空宇宙文化の発信基地として世界に貢献できることを願っています。

第73回公開講座

「地方史への誘い」

期日：平成9年7月18日(金)14:00~16:00

場所：岩村町公民館大ホール

講師：田丸辻郎先生



第73回公開講座が、「地方史への誘い」を演題に、岩村町歴史資料館開館25周年記念講演と併せて、岩村町公民館大ホールで行われました。当日は同町教育委員会の御協力により、歴史資料館など町施設の無料入館券が配布され、三万石の城下町として賑わった岩村の町並みを楽しむこともできました。

講師の田丸辻郎先生は、日本経済史の研究者として活躍されており、『日本歴史大辞典』、『山形県史』等を執筆され、『幕末沿岸村落の経済構造』などの論文も発表されています。また最近では、『戦国武将岩村城主田丸直昌と北畠・田丸氏の歴史』（岩村町教育委員会発行）を著されています。今回の講座では、郷土史を研究するうえでの学術的研究の必要性や、資料により事実を確認することが必要であること、また資料を保存・管理する資料館等の施設のあり方について講演していただきました。当日は郷土史に興味のある方や県内各地の博物館・資料館の関係者のほか、地元の方々も多く参加され、50名を越す人々で会場は一杯でした。

講演では、まず歴史研究の現状について述べられました。歴史学の根本問題は「人間はどこから来て、どこへ行くのか」、「人間とは何か」を探求することであり、その研究の基礎となる資料には、文字によって記された文献資料、物として遺存した遺物資料、風俗・習慣・伝説・民話として伝承してきた民俗資料に分類されること、近年の歴史学では文献資料のみならず、考古、民俗、建築、美術等々の多様な資料を総合的に研究する、学際的な研究が求められてお

り、地方史研究においても同様であること、そしてこれらの資料を保存・管理する博物館、歴史民俗資料館、文書館等の役割が重要であり、資料が十分に活用できるような整理・分類が必要で、特に民俗資料の保存と整理が急務であることなどを話されました。



次に岩村城主・田丸直昌について、通説とは異なった新しい事実が判明したこと、そしてそこに至った先生の研究の経緯や方法について詳しく話されました。特に印象深く残ったのは、先生が執拗なまでの資料検証されることでした。他人の行った研究を鵜呑みにするのではなく、自分自身で古文書に当たってひとつひとつ事実を確認され、また文書の一部のみではなく、全てを隅々まで読まれておられます。さらに古文書の書かれた背景、文書を書いた人の利害関係をも考慮に入れなければならないとも述べられました。

田丸先生ご自身が実践されてきた歴史研究のあり方についての講演は、聞く者にとって実に興味深く、参加者それぞれが郷土史研究に対する新しい視座を得たようです。また地域で各種の歴史資料を保管している博物館や資料館の役割についてのお話は、膨大な数の資料の整理に追われる各館の学芸員にとって大きな課題であると同時に仕事のやり甲斐を感じました。先生の尽きることのないお話に、参加者は最後まで聞き入っていました。

(機関紙委員 土岐市美濃陶磁歴史館

加藤 真司)

第37回会員研修会報告

新しい博物館づくりについて

期日：平成9年6月25日(水)13:00~16:00

場所：七宗町立日本最古の石博物館 出席：38名

事例発表「博物館づくりに携わって」

日本最古の石博物館学芸員 河尻清和

当館は、全国でも数少ない“石の博物館”であることです。さらに、本館は、先カンブリア時代の岩石を中心に展示してあり、先カンブリア時代をメインにした博物館は日本ではここだけで、世界でも数少ない博物館です。また、展示物に触れられるのも本館の特徴のひとつです。もう一つの特徴は、タイムスリップエレベーター、Q & Aコーナー、また、マスコットキャラクターによる解説など、楽しく学べる博物館であることがあげられます。

当館の大きな問題としては、展示内容を決める前に建物をつくったことがあげられます。また、収蔵スペースの不足や収蔵資料の不足も問題点としてあげられます。収蔵資料を充実しなければ展示替えができず、リピーターの確保が難しくなるでしょう。また、娯楽的な設備を取り入れたことで、機械のメンテナンスに時間と費用がかかることが課題になっています。さらに、ソフト面では職員数の不足があげられています。



当館の周辺は学術的に見るべきところがたくさんあり、それらを本館を中心にしたフィールドミュージアムとして整備するべきです。

日本最古の石博物館に限らず、博物館を生涯学習の場として長続きさせるためにも、各博物館のオリジナルの研究や他の博物館および大学などの研究機関と共同研究することも考えて行くべきでしょう。

事例発表「なぜ 今、装飾美術館か」

飛騨高山美術館学芸員 小山 聡

飛騨高山美術館は、ガラス工芸と19世紀末のデザインを中心に収蔵、展示する美術館です。平成9年4月28日に開館しました。一見、この二つの分野は密接な関係がないように思われます。しかし、19世紀末にガラスの歴史の縦軸の上でドラマチックともいえるガレ(彼は木工家具のデザインにも手腕をふるった)の出現と、デザインの出現から範囲の拡大という横軸の交差点がありました。また、国内において、デザインは本格的な常設展示が少なく、ガラス工芸についても、時代や様式を限定した専門館はあるものの、長い歴史を俯瞰して体系的に展示する館が見あたらなかったことも、当館設立の動機となりました。海外ではデザインへの興味が高まり、70年代からデザイン部門を新設したり、特別展を催す有名館が多く、特にモダンデザインの源流ともいえる世紀末デザインの見直しが為されています。最近では、国内でもそのような気運が見られます。このような動きを一過性のものでなく、未永く定着するために役立ちたいと考えております。

なお、当館では、幅広い活動ができるように常設展示室の他、来館者の方々に関連分野への理解を深めて貰うため、ライブラリー、放送局グレードの機器を備えたハイビジョン・シアターを設けています。



(研修委員長 鹿野 勤次)

館・園紹介 No.100

日本まん真ん中センター

☎501-41

岐阜県郡上郡美並村白山430-4

TEL (0575)79-3700

◇交流と地域文化の拠点施設

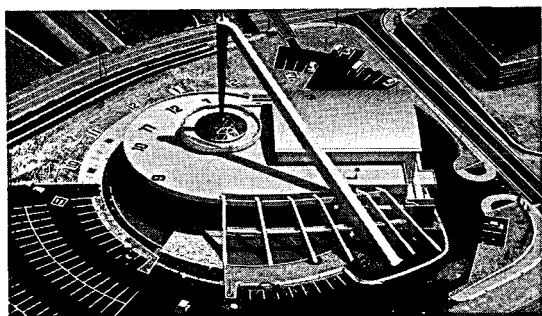
“日本のまん真ん中”に位置する地域の情報発信機能を高めることを重点におき、清流長良川に象徴される美しい水と豊かな自然環境、そして四季折々の素晴らしい景観を活用した施設です。

地域文化の拠点として幅広いニーズ、年齢層に対応した21世紀型生活文化の創造をめざし、ゆとりを楽しむ施設としました。

◇光と影のロマン・・・

あたかも地球の自転を感じさせるかのようにおだやかに移行する指針の影。

この日時計に秘められたロマンと科学を、現代感覚の美しいフォルムに取り込んだ全く新しいタイプの日時計モニュメントは、そのまま日本まん真ん中センターのシンボルとなり、豊かな空間を演出します。



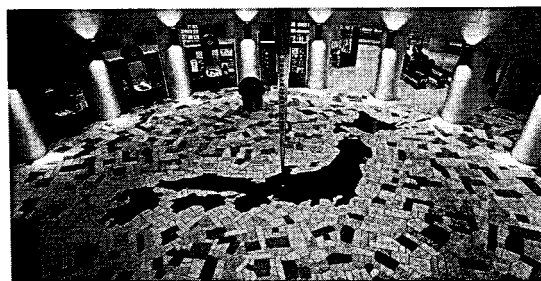
天然石で描かれた日本地図が広がる「373ホール」から天井を通して伸びているモニュメントは人口重心を象徴するもので“み・な・み”のごろ合わせで高さが37.3mあり、このモニュメントは日時計に活用されています。建物上部に斜めに突き出したモニュメントを支えている白い「斜針」が建物北側に影を落として時刻を知らせる仕組みになっています。

この日時計は、現在ギネス社に登録されているアメリカフロリダ州：ウォルトディズニーワールドの日時計をしのぐ、世界最大級の日時計となります。

◇情報展示室

『情報展示室』では名前のルーツをコンピュータで検索し、探求心あふれる空間として来館者に自分のルーツ・ロマンを提供します。

また、ゲーム感覚で日本の衣食住のさまざまな地域差を紹介し東西文化が紹介できる“おもしろ統計コーナー”、郡上八幡在住の造形作家水野政雄氏の自然素材を利用したり作品や長良川流域に生息する動植物を取り上げた“自然環境コーナー”や村の一年などを紹介する“ハイビジョンギャラリー”があります。



◇生涯学習施設

当施設は観光客の誘致を目的とした地域振興の機能だけでなく、生涯学習機能も備えた施設で、500名収容のホールや図書館、視聴覚室、各種研修室などふれあい、交流の場としても充実しています。



- 【設 立】 平成9年4月29日
【開設時間】 午前9時～午後5時
（施設使用：午前9時～午後10時）
【休館日】 毎週月曜日（祝日の場合は翌日）
年末年始
【入館料】 大人 300円
小中学生 100円
【問い合わせ】 ☎501-41郡上郡美並村白山430-4
TEL 0575-79-3700 FAX 79-3555
http://MediaZone.tcp-net.ad.jp/minami
（日本まん真ん中センター：池田法彦）